



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2015

vol. 19

大学の原点

教育推進部 教授 三浦 真琴

旧聞に属することで、しかも私事であるので、ここに披露するのは恐縮至極なのだが、読者諸賢のご海容を賜りたい。今から20年前、当時のIDE（民主教育協会）会長の肝煎りで合衆国北東部に高等教育関係機関を訪問する機会を得た。折しも学士課程教育の新たなパラダイム“From Teaching to Learning”がアメリカの大学界を賑わしはじめた頃である。

訪問先の一つであるM.I.T.では「FDをどのようなのだとお考えでしょうか」と尋ねられ、教師の教育力の向上を目指す組織的な取り組みと応じると「それはもう旧い考え方ですよ」と即座に修正された。日本の高等教育界でフロントランナーを目指さなければならない立場にあった同行の諸先輩は自国の遅れを痛感したと後に述懐されたが、若輩の自分は新しい時代の訪れを告げる、刺激に満ちた考え方だと感じた。

この他にも印象的だったことがある。くだんのM.I.T.はスローンビジネススクールなど、人文社会科学分野の教育研究機関を擁するが、それに伴って校名が変更されることはなかった。創設当時の理念、魂を忘れないためだと教えられた。当初は教員養成機関、現在は大学院であるコロンビア大学のTeacher's Collegeも同様である。ア

メリカの大学界における「革新」と「守旧」二つのフェーズを垣間見たと、この時は感じた。

ひところ、自校教育が脚光を浴びた。現在も綿々とその営為が継承されているはずである。学生に限らず、自分の所属する教育機関の歴史、創設時の想い、それを知ることは大学が自分にとって安心できる居場所であることを確認するために不可欠な営みである。さはさりながら、わたくしたちは果たして自ら奉職する大学の、勤務校ではなく、制度としての原点を確認することがあるだろうか。

11世紀のボローニャでは、ヨーロッパ各地から街の法学者の下に集まった探究心旺盛な学生が出身地別に作った学生団体を基に「自治的な組合（Universitas）」が結成された。世界最初の大学の誕生である。当時、ボローニャ大学の学長は学生から選出され、教授の人選・授業内容・給料は学生組合が決定した。つまらない講義や聴講者の少ない講義には罰金が科せられ、改善が見られない場合には免職が伝えられることもあった。

組合結成の宣言書には、学生の許可なく休講してはならないこと、始鈴・終鈴に従うこと（但し、説明が終わっていない場

合にはその限りにあらず）など、現在にも当てはまる（当てはめるべき）内容が記されている。他方、「学問について一から十まで丁寧に講義すべし」と、知識や情報へのアクセスが往時とは比較できないほど進化している現在では見直しが迫られる項目もある。しかしいずれにしてもここに通底しているのは「学生が中心」であるということだ。

先に述べた新しいパラダイムの要諦は、「学習を創発する機関」として大学を位置づけ、「学生中心主義」を高らかに唱えたことにある。しかしそれは全き革新ではなく、大学の原点に立ち返った上で、今昔の違いを斟酌し、将来を見据えた設計図を描いたもの、すなわち、伝統の創発的復活である。

念のために書き添えておくが、学生中心主義とは学生を消費者に見立て、顧客の優遇を図るということでも、手取り足取り懇切丁寧に指導・教授するということでもない。学びの苑にある者なら誰もが携えている知的好奇心を尊重し、これを刺激すること、それが大学誕生時の理念、魂を忘れぬことだと筆者は心得て、まだ見ぬ彼の地に思いを馳せること、しばしばである。